

pp. 32-61

報告

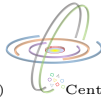
中国語を母語とする日本語学習者の敬語使用

「使うか使わないか」の意思決定における学習者のイマジネーション

発行：2026年3月31日

上川 多恵子 (創価大学 文学部 / 立命館大学 ものづくり質的研究センター)
サトウ タツヤ (立命館大学 総合心理学部)

連絡先：上川 多恵子 (E-mail: tk0715sh@gmail.com)



pp. 32-61

Report

Use of Japanese Honorifics by Chinese-Speaking Learners

Imagination in the Decision-Making of “To Use or Not to Use”

Published: March 31, 2026

Taeko Kamikawa (Faculty of Letters, Soka University / Center for Monodzukuri
Qualitative Research, Ritsumeikan University)
Tatsuya Sato (College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University)

Correspondence concerning this article should be sent to:
Taeko Kamikawa (E-mail: tk0715sh@gmail.com)

I はじめに

日本語を母語としない日本語学習者においては、敬語を学んでも、実際のコミュニケーションで運用できる段階まで到達しにくいという現状が報告されて久しい。敬語の学習については初級レベル後半で導入される日本語教材が多く見られるが、敬語使用の難しさは学習歴が短いことに起因するのではなく、学習歴を重ねるほどかえってその難しさをより深く感じるようになる可能性がある（遠藤 1990）ことが指摘されている。たとえば中国語を母語とする学習者からは、「伝統的な講義式による敬語授業」「文法形式を重視しすぎる敬語授業」「初級で終わった敬語教育」への不満が報告されており（任 2012）、こうした教育方法への批判は学習者の敬語使用に対する苦手意識とも関わりと考えられる。このような敬語使用に対する苦手意識は、実は日本語母語話者にも見られる。清（2006）は日本語を母語とした大学生を対象とした調査において、「敬語を使う」と答えた回答者が93%、「敬語が必要だと思う」と答えた回答者が96.6%に上ったにもかかわらず、敬語に対してもつイメージは「苦手だ」「嫌いだ」「避けたい」が87%を占めたことを報告している。この結果について清（2006）は、実際には必要性を十分に感じているものの、高等学校までの教育で正しい敬語の形式を理解することと動詞を中心とした語彙レベルの敬語を暗記することに終始したために、いざ運用しなければならぬ段階になって、うまく使えず、苦手意識だけを昂じさせていると結論づけている。つまり、日本語学習者と日本語母語話者はともに、敬語の必要性を認識しながらもその使用に苦手意識を抱えるという共通点を持つ。その背景には、知識の習得にとどまり実際の運用に結びつきにくいという教育上の課題が、両者に共通して存在している可能性がある。

ただし、日本語学習者には特有の課題も存在する。魏（2013）は、敬語を使わなくても日本人側に許されることも多い現状があることを指摘し、徳間（2010）は、自分が表現したい気持ちと敬語を使う意識との間に隔たりを感じたり、緊張や反省の経験から敬語の回避やためらいの意識を持つようになったりする日本語学習者もいることを報告している。このような知見は、敬語使用が単なる言語形式の習得ではなく、学習者の感情や自己認識と深く結びついた問題であることを示唆していると考えられる。

しかし、学習者個人が敬語使用に対してどのような意識を持ち、どのようなプロセスを経てその意識を形成・変容させていくのかという、心理的プロセスに焦点を当てた研究は限られているのではないだろうか。井出（1982）は、敬語使用の際の話者の心の中で捉えた社会的、心理的諸要素を分析する必要性を指摘しているが、学習者一人ひとりの経験や価値観、自己表現に対する考え方が実践的なコミュニケーションの場でどのような影響を与えているのかについては、十分に明らかにされていないのではないかと考えられる。

本研究は、このような問題意識に基づき、中国語を母語とする日本語学習者の敬語使用に対する意識の変容プロセスを、個人の心理的プロセスに焦点を当てて分析することを目的とする。具体的には、「複線径路等至性アプローチ：Trajectory Equifinality Approach（以下、TEA）」の理論的枠組みの一つである「発生の三層モデル：Three Layers Model of Genesis（以下、TLMG）」とTania Zittoun（タニア・ズィットゥン）のイマジネーション理論を援用した「ナノエスノグラフィの分析手法としてのモデル」（上川・サトウ 2025）を用いて、協力者5名の「敬語を使う」または「敬語を使わない」という選択に影響を与えた価値観・信念の形成と変容を明らかにするとともに、心理内で調整される記号（詳しくは後述）とイマジネーション（想起と予期）を考察する。

II 中国語を母語とする日本語学習者が敬語学習に困難を感じる背景

中国語を母語とする日本語学習者の敬語使用については、その学習方法や学習環境について論じられることが多い。任（2013）は、中国の大学において日本語を専門的に学ぶ学生を対象とした教科書の敬語項目を分析した結果、語彙・文法として扱う傾向が強く、コミュニケーションの観点から欠けていることを明らかにした。この指摘は、敬語を言語形式として教授することに偏重し、実際のコミュニケーション場面での運用能力の育成が不十分であることを示唆している。次に、崔（2012）は、162名の中国人留学生を対象とした調査において、学習者の敬語の役割に対する認識が「相手への尊敬の気持ちを表す」という点に集中していることを報告し、敬語教育におけるコミュニケーション的観点の欠如を問題視している。蒲谷（2013）によれば、敬語コミュニケーションとは尊重・敬意を伴うものにとどまらず、ユーモアや皮肉、冗談なども含むものである。そのため、「尊敬の気持ちを表す」という認識は敬語の側面を捉えたものではあっても、場面や関係性に依拠してどのように敬語を選択・運用するかという判断能力を育成するという点においては不十分であると考えられる。崔（2012）が問題視するのは敬語に対する知識と運用能力の乖離であり、敬語をめぐる教育課題は形式の習得にとどまらず、コミュニケーション場面における個人の判断能力をいかに育てるかという点も重要視されている。

このように、日本語の語彙・文法中心の学習が多く行われており、敬語コミュニケーションの運用能力が向上しにくい教育環境が指摘される。しかし、中国語を母語とする日本語学習者が敬語使用に対して苦手意識を抱える背景はその学習方法と学習環境の影響だけとは限らない。こ

こでは、中国語を母語とする日本語学習者が抱える敬語使用に関わる課題と苦手意識の背景について、以下の「人称的な敬語表現（人の呼び方にかかわる敬語表現）」「心的距離」「自己表現」の3つの論点から論じたい。

まず一つ目に、中国語を母語とする日本語学習者が敬語学習に困難を感じる背景には、母語における敬語体系の特徴も深く関わっていると考えられる。中国語を母語とする日本語学習者の場合、現代中国語の敬語表現として特に多用される「人称的な敬語表現」は、相手に対する「話し手個人の主観的な判断」が反映されやすいという特徴を持つ。

王（1989）によれば、中国語の敬語表現は「人称的」な使い方が大きな比重を占めており、世代・身分など人間関係に応じて厳しい使い分けが要求される。同級生・同僚・友人の間では姓名を呼び捨てにする一方で、封建的身分制度が続いてきた中国では、家父長制や身分制度などの伝統的な意識の影響により、自分よりも世代と身分が高い人に対してはその呼び方に工夫を凝らさなければならず、呼ばれる側も呼ばれる方を非常に気にするという。王（1989）は、中国では適当な親族名称が使える子どもは礼儀正しい子どもだと評価されるとも述べており、人称表現の適切な使用が社会的評価に直結することを指摘している。

人称的な敬語表現の代表的な例として、二人称代名詞における“你／您”の使い分けが挙げられる。滝浦（2017）は、蘆（2001）の調査を引用しながら、“你／您”という親称／敬称について論じている。それによれば、年配の相手、大学の先生、親といった自分よりも立場的な地位が上の場合は“您”が積極的に使われるのに対して、相手への敬意が喪失した場合または相手との距離が近づいたと感じた場合には“您”から“你”へシフトされる。

このことについて、蘆（2009）は日本語と中国語の呼称の根本的な違いを次のように説明して

いる。総合的にみれば、日本語の呼称も中国語の呼称も整然とした社会的ルールに縛られている。ただ、両者を取り巻くルールが異なっている。日本語の呼称には社会的通念に従って行われる客観的、定型的な特徴が見られるのに対して、中国語の呼称は、相手との関係や相手の身分などに基づいて、個人的な判断で決定する主観的で多様な特徴が見られると指摘しており、中国語における人称的敬語表現が社会でコミュニケーションを行う上で重要な役割を果たしていることを示すとともに、日本語の敬語体系との相違を浮き彫りにしている。このように、中国語の代表的な二人称代名詞である“您”から“你”へのシフトに関する言及は、中国語母語話者の中で立場的な上下関係とは異なり、「話し手自身が相手に対してどのような感情を持っているのか」という「個人の主観的判断」が反映されやすい傾向にあることを示唆している。個人の主観的判断による人称のシフトは、相手への敬意が喪失した場合だけでなく、相手との距離が近づいたと感じた場合にも生じる。そのため、日本語では社会的通念として敬語の使用が求められる場面においても、中国語を母語とする日本語学習者は相手への親しみなどの個人の主観的判断を優先し、敬語の使用をためらう可能性がある。これは、日本語母語話者が場面や関係性の変化に応じて敬語を省略する場合とは異なり、中国語の呼称から見たような主観的・個人的な判断が優先されやすいという中国語の敬語表現の特徴の影響によるものと考えられる。ただし、上記は呼称に関する特徴であり、敬語運用全般については別途検討が必要である。

二つ目に、日本語の敬語そのものも、歴史的に大きな変遷を遂げてきた。その変化を理解することは現代の敬語使用における「心理的距離」の意味を把握する上で重要である。

吉岡（2008）は、国立国語研究所が1957年に初めて提出した『敬語と敬語意識』という社会調査をもとに、人々の敬語についての意識や考え

方に混乱が生じていたという結果を示し、敬語行動や敬語意識も社会の変化とともに変わっていくことを指摘している。この調査の実施期間は1952～53年（戦後の激動期）であり、民主主義が標榜されながら社会体制や人々の生活が大きく変化した時代でもあった（吉岡 2008）。

吉岡（2008）がこの調査で注目したのは、第一に「上下関係重視の規範意識や慣習を保ちながら、新しい時代の人間関係の把握に基づく敬語行動のあり方を模索していること」、第二に「場面によってウチ・ソトの関係と上下関係をどう捉えたらいいのか（適切か）、という敬語の基準がゆれていること」であった。このように、人間関係の把握や場面によるウチ・ソトの関係と上下関係の捉え方に対する判断の難しさは、戦後の日本人を対象とした調査においても明らかとなっている。

また、滝浦（2005）は、日本語の敬語が「絶対敬語的な性格が弱まるとともに相対敬語的な性格が強まる（p. 63）」という変遷をたどってきたと指摘している。現代の敬語は、固定的な身分を背景に話題として登場する人物への敬意を示すばかりではなく、目の前の話し相手への配慮を優先し、その意味は「心理的距離」を表す（井上・鑑水 2017）。井出（1982）は「心理的距離」について、「相手に対して持つ改まりの気持ち（最も丁寧）、気楽な気持ち（最も丁寧でない）を両極とし、話し手と相手の間におきる心理的なへだたりのこと」と定義している。

ただし、ここでの改まりの気持ちが最も丁寧で、気楽な気持ちが最も丁寧でないという表現には補足が必要であると考えられる。井上（2017）によれば、平安時代の古典文学などとは異なり、現在の敬語の「敬」の字は敬意を表すものから遠ざかり、目の前の相手に気を使う（目の前の相手への配慮を優先する）という言葉で「心理的距離」を表現していると述べられている。また、中村（2021）によれば、相手と親しいかどうかという距離感に基づいた親疎関係が重視されるよう

になったことに加えて、話題に登場する人よりも「聞き手への配慮」が中心になったと論じられている。井上・鎌水（2017）は、日本の敬語が話し手と聞き手の心理的な関係を表すのにふさわしい方向へと変化しつつあり、依頼や負い目、負担の度合いによる流動的な使い分けが発達して個人の心理的側面が前面に出るようになったことを指摘し、例えば、何かを依頼する時に相手の負担などを考えながら目の前の相手に気を使ったり、配慮したりするという心理的距離を表現するために敬語がよく使用されるようになってきている。つまり、「目の前の相手との親疎関係に基づきながら、その目の前の相手に気を使う（配慮すること）」を、人々が「丁寧さ」と結びつけている。

このように、敬語運用全般について言えば、現代日本語の敬語は、流動的で状況依存的な運用が求められる体系へと変化しており、状況依存的な運用が求められる敬語使用は日本語母語話者ならびに日本語を母語としない学習者にもその難しさを感じさせていると考えられる。

最後に、上田（2014）は、「敬語を使う」という行為には、話し手と聞き手のふさわしい心理的距離を考えながら、目の前の相手に気を使ったり配慮をしたりすることに加えて、「自己表現」も可能とするという敬語の働きがあると指摘している。この「自己表現」としての敬語という視点は、敬語使用が単なる社会規範への適応や相手への配慮だけでなく、話し手自身のアイデンティティや意図を表現する手段でもあることを示唆している。

敬語コミュニケーションは、尊重の意識や敬意のあるもの、尊重の意識や敬意のないもの、ユーモアや皮肉、冗談などの意識をもつものも含まれている（蒲谷 2013）。そして、どういうときに敬語は必要ないのかということを考えることが重要となるが、実際に敬語の必要性を決定するのはその表現を行う個人である（蒲谷 2006）と指摘されているように、実際の生活の中でど

のような表現を用いてふるまうのかということは個人の判断にゆだねられている。その場での状況を適切に判断し、どう自己表現を実現するのか。そのためには、どのような言葉を使えばよいかということを一瞬に考え実践する必要があることは、敬語使用に対して苦手意識を持たせる要因の一つであると言える。

ここでは「人称的な敬語表現」「心的距離」「自己表現」の3つの論点から中国語を母語とする日本語学習者の敬語使用に難しさを感じる要因について考えてきた。井出（1982）は、敬語使用の際の話者の心の中で捉えた社会的、心理的諸要素を分析する必要性を指摘しており、敬語使用を決定する要因は基本的には上下・親疎関係の距離であるが、話し手のさまざまな形の自己表出的な欲求があると論じている。

中国語を母語とする日本語学習者一人ひとりの中に存在しているこれまでの経験や価値観、自己表現に対する考え方などが実践的なコミュニケーションの場でどのような影響を与えているのか。それぞれの学習者における敬語学習経験や学習環境について考えるとともに、学習者自身の自己表出的な欲求の側面を捉えることも必要なのではないだろうか。

III 研究目的と研究方法

本研究の目的は、中国語を母語とする日本語学習者が「敬語を使う」または「敬語を使わない」という選択をする際に、どのような経験や要因が影響を与えているのかを明らかにすることである。本論文では、研究協力者5名の「敬語使用の必要性を認識し、それを維持する」プロセスを統合 TEM 図とイメージネーションループで分析した結果をもとに、TLMG とイメージネーション理論を援用した「ナノエスノグラフィの分析手法としてのモデル」を用いて、協力者らの選択に影響を与えた記号を抽出する。そして、

協力者らが過去の経験をどのように想起し、未来をどのように予期しながら現在の判断を行っているのかを明らかにする。これにより、敬語使用という「目に見える行為」の背後にある「目には見えない文化」を可視化し、学習者一人ひとりの経験や価値観、自己表出的な欲求が実践的なコミュニケーションの場でどのような影響を与えているのかを理解することを目指す。

1 研究方法の理論的背景

—ナノエスノグラフィと分析手法モデル

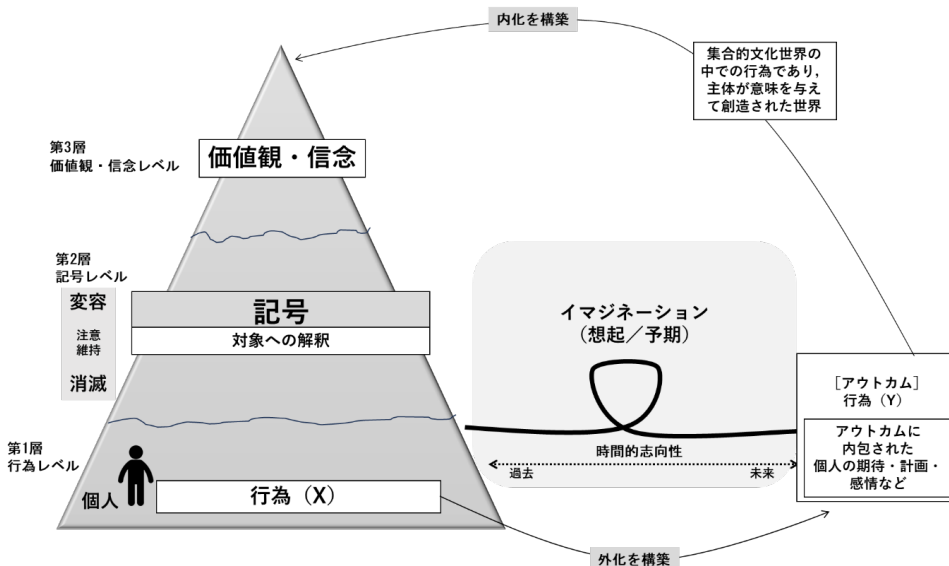
本研究では、TEA（複線径路等至性アプローチ）における TLMG（発生の三層モデル）と Tania Zittoun（タニア・ズィットウン）のイメージネーション理論を援用して分析を行う。TEA は、「歴史的構造化ご招待（Historically Structured Inviting：以下、HSI）」と呼ばれる「研究協力者をご招待する方法」、「複線径路等至性モデリング（Trajectory Equifinality Modeling：以下、TEM）」と呼ばれる「非可逆の時間に基づ

き人生の径路を捉え可視化する方法」、「発生の三層モデル（Three Layers Model of Genesis：以下、TLMG）」と呼ばれる「価値の変容や維持を捉えることができる方法」である三つの方法論から構成される。本論文で用いる TLMG は「分岐点：Bifurcation Point（以下、BFP）」に焦点を当てて内化と外化の変容プロセスを研究されることが多く、ここでは「敬語使用に対する意識」を促した記号と「敬語使用」に伴う価値観・信念について分析し考察を行う。また、ズィットウンのイメージネーション理論における「イメージネーションループ」を援用し、個人の行為の外化に伴うイメージネーション（想像）を分析する。このような TLMG とイメージネーションループを用いた分析手法は上川・サトウ（2025）の「ナノエスノグラフィの分析手法としてのモデル」（図1）において提案されている。

(1) ナノエスノグラフィについて

以下ではまず、「ナノエスノグラフィ」について説明する。上川・サトウ（2025）は、「目に見

図1 ナノエスノグラフィの分析手法としてのモデル



(上川・サトウ 2025 を一部修正)

える行為」がどのような心理内的プロセスを経てその姿を現しているのかを考え、個人の心理内で調整される記号という「目には見えない文化」のプロセスを研究するために、TEA とエスノメソドロジック的視点を参考とした「ナノエスノグラフィ」を提案した。TEA は Jaan Valsiner (ヤーン・ヴァルシナー) の記号論的文化心理学に基づく理論的背景を有しており、文化は個人に属するものであると考える。ヴァルシナーの述べる文化とは、個人が世界と関わる様々に異なるプロセスを通して体現されるものであり、文化は「内化と外化のプロセス」という「個人と社会的世界の間の相互構成」と見なしている。そのため、ヴァルシナーの主張する文化は、実在するものというより、むしろこのような仮定されたプロセスのことである (Valsiner 2007/2013) と位置づけられている。

そして、ヴァルシナーは nano psychology (ナノサイコロジー) の可能性を指摘している。ナノサイコロジーとは、ある事例から得られる知識を最も広く応用できるよう、可能な限り小さな独自の事例を研究する学問 (筆者訳; Valsiner 2018) であり、人間にとって重要な実存的経験を含む、最小限の固有のデータから出発し、知識を最大に一般化する原理を見出していくものとしてヴァルシナーによって提案された (小澤 2025)。また、ヴァルシナーは、人々はある瞬間に「腑に落ちる」ような体験を日常的に行っており、そのような人間の感情がどのように形作られ、変化し、最終的に人間の行動を導く意味システムとなっていくのかを研究する方法を確立することの必要性 (Valsiner 2015) を指摘している。ナノエスノグラフィはこのようなナノサイコロジーの観点を視野に入れ可能な限り小さな独自の事例を研究する学問の一つとして提案された。

このような背景をもとに、上川・サトウ (2025) は場や場面 (setting) を単位として扱い、その場における行為-記号-価値観・信念および行為に

伴う個人の思考を分析することを提案しており、「ナノエスノグラフィ」の分析の視点は TEA が依拠する記号論的文化心理学の理論とともにエスノメソドロジック的視点を手掛かりとしている。上川らが述べるエスノメソドロジック的視点とは、エスノメソドロジックが他者とともに作りあげている社会を志向し、人びとが実際に解きうる問題を解くことに寄り添う研究方法であるとともに、自明な日常世界の解剖を目指した研究方法であるという点である。檜田・岡田 (2019) は、エスノメソドロジックは研究者が一方的に社会理論を作るための研究方法ではなく、人びとが実際に解きうる問題を解くことに寄り添う研究方法としての可能性がある」と指摘し、南 (1996) は、エスノメソドロジック研究は自明な日常世界の解剖であり、エスノメソドロジックは人びとの日常的実践行為のなかに、自明的な世界を構成する「方法」を読み取ろうとする方法であると述べている。また、Francis & Hester (2004/2014) は、エスノメソドロジック研究は一目でそれとわかる事柄について、自己省察の態度をとることから始まり、なじみのある光景や活動がどのように産出されるのかという問いを立てると論じている。このようなエスノメソドロジックの視点を参考とし、ナノエスノグラフィにおいても、「人々の日常生活の中で行われている馴染みのある自明的な活動に対し、その活動がどのようなプロセスを経て生み出されていくのか」という視点を重視している。

次に、エスノメソドロジックは『質的研究法マッピング』(サトウ 2019b) において「過程」と「理念性」(現象の背後にある本質的なことを理解するのか) を重視するものとされ「記述の意味づけ」というラベルで整理されたものの中に位置づけられている。同書において、TEA は「過程」と「実存性」(実際に存在することを理解するのか) に分類されており、両者は「過程」を扱うという点では一致するが、実際に存在することを理解するのか、現象の背後にある本質的なことを理解するのかという学問の姿勢では一致しな

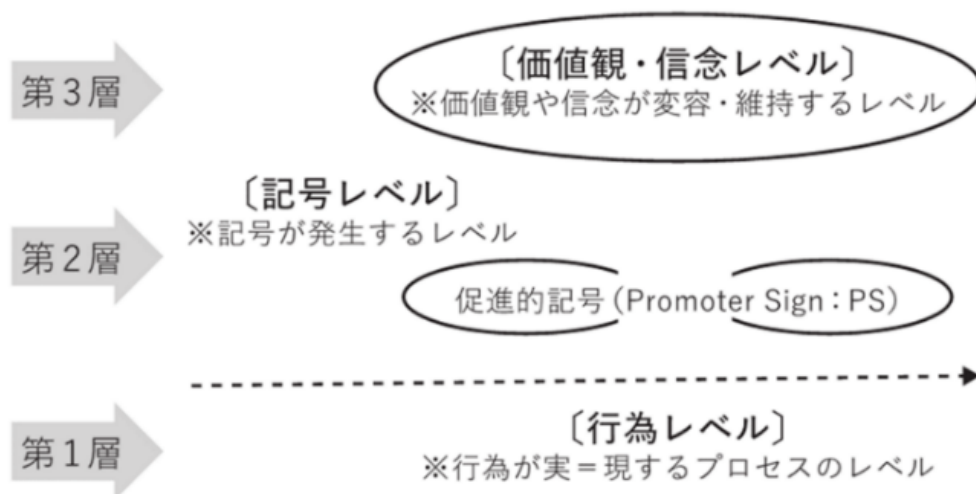
い (サトウ 2019b)。しかし、一致しないということは決して対立を意味するものではなく、本研究では相補的な関係であるとして捉え、「ナノエスノグラフィ」はある活動について、エスノメソドロジック的視点を用いた記述の意味づけ (現象の背後にある本質的なことへのアプローチ) を行いつつ、TEA を用いて個人の行為-記号-信念・価値観および行為に伴う個人の思考の過程を分析していくものである。

(2) ナノエスノグラフィの分析手法としてのモデル

図1で示した「ナノエスノグラフィの分析手法としてのモデル」(上川・サトウ 2025)はTLMGとイマジネーションループを援用し、その図式化はヴァルシナーの「相互依存的な構築プロセスとしての内化と外化」の図を参考として作成された。

まず、図1の左側に位置する三角形は、TLMG(図2)を採用したものである。TLMGは「行為レベル(第1層)」「記号レベル(第2層)」「価値観・信念レベル(第3層)」の三つの層により人間の内的変容過程を理解する(安田 2019,

図2 発生の三層モデル



(安田 2023, p. 97)

2023) ことができ、主にTEMにおける「分岐点(BFP)」で生じる個人の自己変容や行動変容を分析することができる。BFPとは「等至点(EFP)¹⁾」に至るまでの複数の径路の分かれ道であり、突然新しい選択肢が現れたりするポイントである(安田 2015)が、TLMGはBFPにおいて文化的記号を取り入れて変容していくシステムとしての人間の内的変容過程を理解する理論体系(安田 2017)であり、「記号」が重要な概念の一つとなっている。

TEAにおける記号とは、開放システムとしての人と外界とのコミュニケーションを行う際の媒介になるものであり、歴史的・文化的・社会的な影響を分析するための概念(宮下・上川・サトウ 2022a)として重要なものである。そして記号は、TLMGにおいては三つの層のうちの一つである「記号レベル(第2層)」で分析される。

ヴァルシナーは時間の流れの中で人を何か新

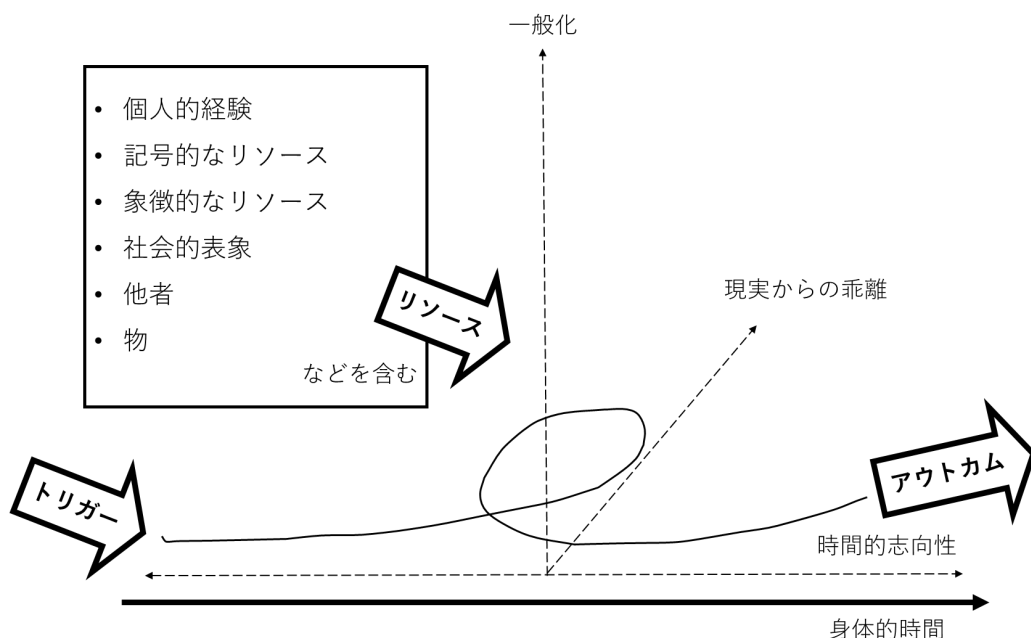
1) EFP(等至点: Equifinality Point)とは、個々人が固有の径路をたどっていても、時間経過の中で等しく到達するポイントを指す。その背景には人のライフ(生命・生活・人生)が歴史的・文化的・社会的文脈に埋め込まれたなかで時間とともにゆくものであるという見方が存在している(サトウ 2017, 上川 2023)。

しいことへ導く作用が記号にはあることを重視し、記号を「未来と向き合う何らかの機能を持ち、過去の状態から何か新しいことへと導く何かである（サトウ 2019a, p. 36）」と定義した。このような「新しいことへ導く記号の働き」を重視して作りだした記号概念は「促進的記号」と呼ばれている（サトウ 2019a）。つまり、BFPにおける促進的記号の発生を価値・信念との関連でとらえる（安田 2023）ように、あらゆる記号は促進的記号として機能する可能性があること、そして、人間にとっての未来を志向する時間を拡張し、さまざまな未来の可能性を構築するガイドとして記号が作用する可能性がある（宮下・上川・サトウ 2022a）ことが、TLMGにおける「記号レベル（第2層）」を分析する上で重要となる。

次に、「イメージネーションループと三つの次元」（図3）について論じる。イメージネーションとは過去の経験をもとに新たな考え方やイメージをつくるプロセスを意味し、現実と近接する世界の想像（木戸 2023）を扱うものであり、イマジ

ネーションは、「今-ここ」にある近位の経験から人を切り離すことである。イメージネーションは日本語に訳せば「想像」という表現となるが、ここでのイメージネーションという言葉には「想像」に加えて「構想」の意味が含まれている（木戸 2023）。Zittoun & Gillespie (2016) はイメージネーションを「トリガー」、「リソース」、「アウトカム」を伴う「時間的な連続のループ」であるとして概念化している。「トリガー」は、経験の近位圏から人を切り離すきっかけとなるものであり、「リソース」は、「個人的経験・記号的なリソース・象徴的なリソース・社会的表象・他者・物など」を指し、個人の経験だけでなく社会的に共有されたイメージもリソースとなる。また、個人が持っているリソースは多ければ多いほど想像を広げていくことができると考えられており、それらのリソースを使って人々は想像を広げていく。そして、「アウトカム」は想像して現実世界に戻ってくるときに新しい何かが得られる結果である。この新しい何かとは、感情的な

図3 イメージネーションループと三つの次元



Zittoun (2020), 宮下・上川・サトウ (2022b), 木戸 (2023), 上川・サトウ (2025) をもとに作成

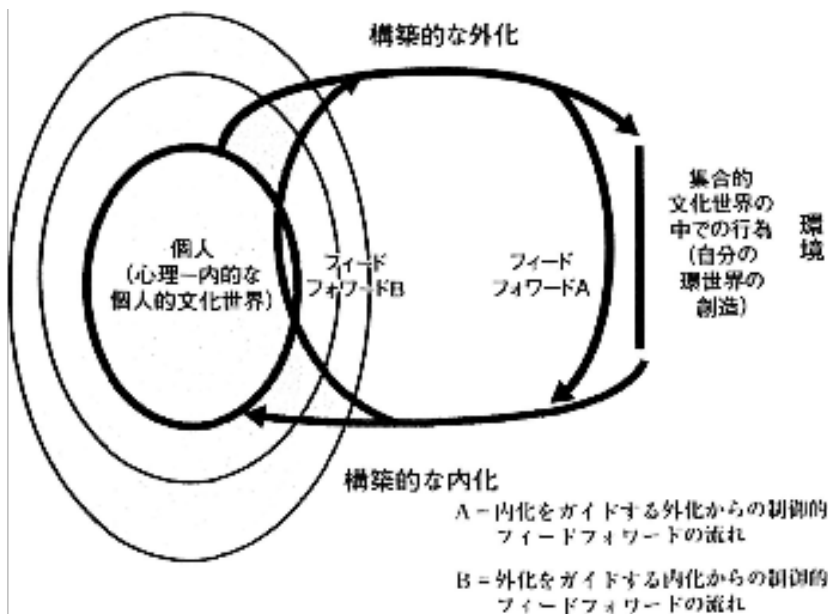
ものや新しいアイデアが浮かんでくるといったこと、具体的な計画などが含まれる (Zittoun 2020)。

また、イマジネーションループは、身体的時間軸上の「いま・ここ」を起点として、「一般化」(抽象性)および「現実からの乖離」(現実との距離)の方向へと上昇すると同時に「時間的志向性」(想起と予期)の軸に沿って過去または未来の経験を探る。イマジネーションループと三つの次元における「一般化」とは抽象性を指し、上に向かうほど抽象度が高まる。例えば、棒を魔法の杖に見立てて遊ぶようなことは具体的なものに基づいた象徴と言え、一方、世界平和のようなことを考えることは抽象的な一般化が高いものと言える (木戸 2023)。「現実からの乖離」(もっともらしさ)とは現実との距離を指し、右斜め上方向に向かうほど実現可能性が困難になることを想像することを示す。何をもっともらしいと考えるかは、その人が持つ様々な物質的、社会的、象徴的な制約や実現可能性によって決まる (Zittoun & Gillespie 2015, 木戸 2023)。そ

して、本論文で分析の対象とする「時間的志向性」とは、時間的な方向性を示すものであり、未来のことを予期したり、過去のことを想起したりすることを表す。木戸 (2023) が「意識を探索するイマジネーションは遠い過去の経験を探ったり (想起)、未来の体験を探ったり (予期) することができる (p. 69)」と論じているように、図3における点線で示す「時間的志向性」の矢印は、「未来」を予期すること (右向き)、「過去」を想起すること (左向き) を表している。このように、人のイマジネーションは、「トリガー」が発生することによって始まり、さまざまな「リソース」の影響を受けて過去や未来の経験を探ったりすることで「アウトカム」へと至る (上川・宮下・安田・サトウ 2024)。イマジネーションループは「いま、ここ」の近接した状況やその物理的な状況と身体的時間における経過が再び統合するとき完了する (木戸 2023, p. 70)。

最後に、「相互依存的な構築プロセスとしての内化と外化」(Valsiner 2007/2013, p. 421) (図4)とは、個人と環境との関係を表したものであ

図4 相互依存的な構築プロセスとしての内化と外化



(Valsiner 2007/2013, p. 421)

る。個人の内部に焦点をあてた内化と外化のプロセスは、能動的な環境との関係を経て絶えず変化している。ここでの個人と環境とは、「個人的文化 (personal culture)」と「集合的文化 (collective culture)」と呼ばれるものの集合体であると考えられている (上川・サトウ 2025)。個人的文化とは、個人の記号レベルにおける解釈構造であり、集合的文化とは、個人間のコミュニケーションにおける言動の意味産出システムを指す (森 2009)。また、個人的文化と集合的文化は相互関係的な関係にあり、両者が絶えず浸透し合うことで文化的発達が生じ、発達とは個人の内部の閉じた変化でも環境からの一方的な影響でもなく、双方の相互作用から生まれるものである (香川 2009)。また、Jensen (2020) は「個人的環世界 (personal umwelt)」という概念を提示し、個人的環世界とは、人間が特定の環境で成長する過程で発達させる、個人が概念化した世界を意味している。つまり、人は環境のすべてを認識するのではなく、自らの選択によって一部を意味あるものとして認識し、その組み合わせで世界を構成していると言える。

2 研究協力者およびデータ収集方法と分析の手順

(1) 研究協力者およびデータの収集方法

研究協力者は、中国国内・地域の大学で日本語を専攻として学んだ経験を持つ中国語を母語とした日本語学習者 5 名 (協力者 A, B, C, D, E: インタビュー当時 20 代女性, 日本の大学院に進学した経験を持つ) である (表 1)。

本論文では、5 名の協力者に対してそれぞれのインタビュー時に本研究に関する説明を行い、協力者の研究参加の自由と中断を保障し、本研究への参加が日常生活での不利益になることがないかという倫理的配慮に関する確認を行った上で研究参加に関する同意書に署名を得た。

本研究のインタビュー方法は、まずはライフライン・インタビュー (Life-Line Interview Method) を用いて「敬語使用の必要性に対する

表 1 協力者 A～E (5 名) に関する概要

	大学時代の留学経験の有無および卒業後の進路
協力者 A ¹	上海の大学で日本語学科を専攻。大学時代に日本留学の経験はないが、日系企業でのインターンシップを経験する。大学を卒業後、大学院進学のために来日し、修士号取得後は日本国内で就職する。
協力者 B ²	大連の大学で日本語学科を専攻。大学時代に日本留学の経験はない。大学を卒業後、大学院進学のために来日する。
協力者 C ³	マカオの大学で日本語学科を専攻。大学時代に日本留学の経験がある。大学を卒業後は地元の某有名ホテルに就職したが、退職して大学院進学のため来日する。
協力者 D	天津の大学で日本語学科を専攻。大学時代に日本留学の経験はない。大学を卒業後、地元の企業に就職し、技能実習生の通訳として日本本社に派遣される。
協力者 E	上海の大学で日本語学科を専攻。大学時代に日本留学を経験する。大学を卒業後、大学院進学のために来日する。

¹ 上川 (2015, 2017) における研究協力者

² 上川 (2015) における研究協力者

³ 上川 (2019) における研究協力者

気持ちの変化」を協力者に曲線で描いてもらい、その変曲点での出来事について電話やコミュニケーションアプリ、対面で非構造化インタビューをそれぞれの協力者に2～3回行った。電話及び対面でのインタビューの内容はすべてICレコーダーに録音した。なお、インタビュー前に協力者に対して筆者から敬語に関する説明や意味を質問することは行っておらず、インタビューの中から協力者本人らが敬語をどのようなものとして捉えているのかを考察するようにした。その結果、協力者5名は「です・ます」(丁寧語)を普段の日本語として認識しており、敬語とは主に「尊敬語」と「謙譲語」を指していた。また、「御社」などの語彙および「おはようございます」「ご無沙汰しております」「いらっしゃいませ」などの改まった挨拶表現も敬語として認識していた。本研究では、協力者5名のこのような敬語に対する認識があることを前提にデータの分析を行った。

(2) データ分析の手順

データ分析の手順は以下のとおりである。

まずインタビュー内容を文字化し、文字データを意味のまとまりごとに分節化した。協力者の話した順番ではなく、その事象が起こった順(時系列)に並べ、それぞれのTEM図(複線径路等至性モデリングを用いて作成した図)を作成した上で協力者5名の統合TEM図(図5)を作成した。

本研究での統合TEM図では、SD(Social Direction:社会的方向づけ)およびSG(Social Guidance:社会的助勢)は明記せずに協力者5名の大学時代とその後の進路を中心とした「敬語使用に対する意識」に関する経験のプロセスを可視化することを目的とした。そして、協力者5名それぞれにとってどのBFPが、敬語使用に対する意識が変容するトリガーとなった経験となっているかを示した。また、統合TEM図で

は協力者5名それぞれの「トリガー」となったBFPを明示するために、該当する事象にイメージネーションループを描いた。本論文においては、5名それぞれのトリガーとなったBFPは表2に示し、イメージネーションループの分析結果は表3に示す。

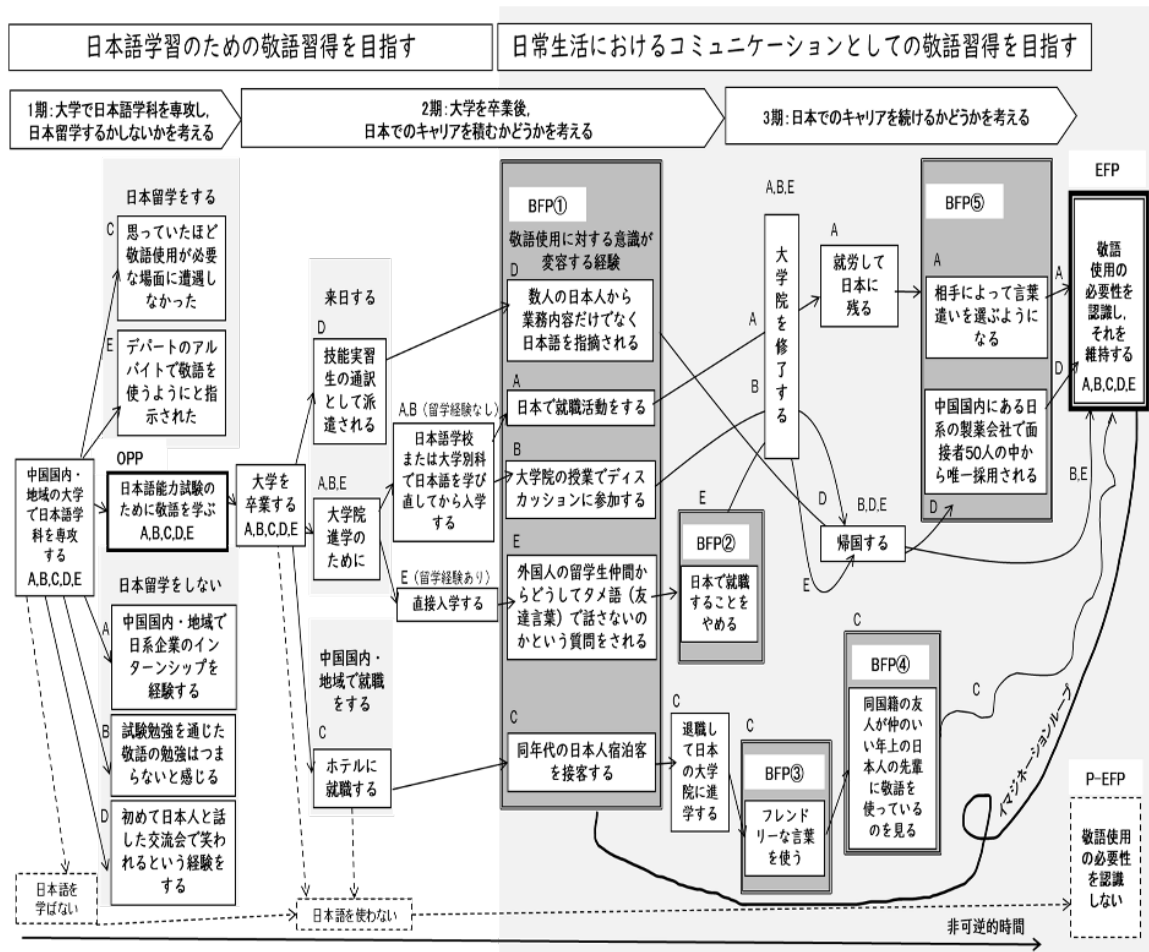
本論文における協力者A～Eの敬語使用に対する意識の変容プロセスの概要は以下のとおりである。

協力者Aは、大学卒業前の日系企業インターンシップでは敬語の必要性を感じていなかったが、大学院進学のために来日後、『就職活動を行った』(BFP①)際に敬語の必要性を強く認識した。就職活動での失敗が重なり「敬語ができなければ日本で就職ができない」と日本語能力に自信を失った。しかし、大学院修了後に高級腕時計店の販売員として就職し、『相手によって言葉遣いを選ぶようになる』(BFP⑤)ことを意識するようになった。店長からの高評価や同国籍の同僚の存在、接客機会の増加を通じて、敬語が使えるようになっていく自分に「心強さ」を感じ、敬語使用への自信を獲得した。

協力者Bは、大学時代は試験のために敬語を学ぶだけで「敬語はつまらない」という認識を持っていた。大学院進学前に教授へメールを送る際に一時的な必要性を感じたが、『大学院の授業でディスカッションに参加する』(BFP①)中で、同国籍の友人や日本人院生が敬語を使う様子を観察し、自身も少しずつ敬語を使うようになった。観光地の土産屋でのアルバイトを通じて、敬語を使うと日本人客に信頼してもらえるという意識を持つようになった。

協力者Cは、大学3年次の日本留学で敬語の必要性に疑問を持つようになった。大学卒業後、マカオの某有名ホテルで就職し、『同年代の日本人宿泊客を接客した』(BFP①)際に、親しみをもってもらいたいという気持ちで友達と話すかのように接客した。退職後、日本の大学院に進学し、『フレンドリーな言葉を使う』(BFP③)

図5 敬語使用の意識変容に関する統合 TEM 図—協力者 A～E (5名) を対象に



ことを意識していたが、『同国籍の友人が親しい先輩に対して敬語を使っているのを見た』(BFP ④) ことで、自分の日本語使用と敬語使用の必要性の間で葛藤し始めた。「敬語使用の必要性を認識し、それを維持する」に向かっているが、心理的葛藤を感じる機会が多く、その径路には揺れが見られた。

協力者 D は、大学時代に日本人との交流会で笑われた経験から日本語を話すことに苦手意識を持っていた。就労のために来日し、技能実習生の通訳として働く中で『日本人から協力者 D が話す日本語を指摘される』(BFP ①) ことが続き、日本での生活に困難を感じた。自身の日本語

能力について反省し、敬語を含むビジネス日本語を学び直した。東日本大震災により帰国をよぎなくされ、『北京にある日系の製薬会社で面接者 50 名の中から唯一選ばれる』(BFP ⑤) という経験をした。その際に日本人面接官から日本語能力(敬語が使えること)を褒められたことで、より敬語の必要性を認識し維持するに至った。

協力者 E は、大学 3 年次の日本留学前から日本語学習を通じて「敬語は複雑だが重要なものだ」という認識を持っていた。大学院進学のために来日後、『外国人の留学生仲間からどうしてタメ語で話さないのかという質問をされた』(BFP ①) ことで、相手によって言葉遣いを変えること

表2 「敬語使用に対する意識が変容する」トリガーが発生したBFP

	「敬語使用に対する意識が変容する」トリガーが発生したBFP
協力者 A	BFP①：日本で就職活動をする BFP⑤：相手によって言葉遣いを選ぶようになる
協力者 B	BFP①：大学院の授業でディスカッションに参加する
協力者 C	BFP①：同年代の日本人宿泊客を接客する BFP③：フレンドリーな言葉を使う BFP④：同国籍の友人が仲のいい年上の日本人の先輩に敬語を使っているのを見る
協力者 D	BFP①：数人の日本人から業務内容だけでなく日本語を指摘される BFP⑤：中国国内にある日系の製薬会社で面接者 50 人の中から唯一採用される
協力者 E	BFP①：外国人の留学生仲間からどうしてタメ語（友達言葉）で話さないのかという質問をされる BFP②：日本で就職することをやめる

に意識を向けるようになった。敬語を使うことは「その場に溶け込む」ための表現方法と考え、日本で仕事をするなら敬語のマスターは必須と考えていたが、『日本で就職することをやめる』（BFP ②）と決めてからは「敬語をマスターしようという気持ちも薄れた」。しかし、日本国内にいる現在は「敬語使用の必要性を認識し、それを維持する」に至っていると語った。

次に、イメージネーションループのトリガーが発生した分岐点（BFP）を中心にどのような過去や未来について想像したり思考したりしていたのかを分析した。ここでは表2で示した「敬語使用に対する意識が変容する」トリガーが発生した研究協力者 A～E それぞれの BFP（以下、トリガーとなった経験）を中心に、イメージネーションループによる分析結果を表3のように整理して提示する。表内では、「トリガーとなった経験」「イメージネーションに影響を与えたリソース」「トリガーとなった経験に伴うイメージネーション」「アウトカム（今到達している敬語使用への態度）」を整理した。

最後に、本論文では TLMG とイメージネーション理論を援用した「ナノエスノグラフィの分析手法としてのモデル」（図1）を用いて、研究協力者5名の「敬語を使う」か「使わないか」の選択

へと導いた記号を明らかにするとともに、敬語使用に対する価値観・信念を分析し考察を行う。

以下では、上述した5名の統合 TEM 図（図5）および各研究協力者のイメージネーションループによる分析結果表（表3）の分析結果をもとにして、「ナノエスノグラフィの分析手法としてのモデル」（図1）を用いた分析結果と考察について論じる。

IV ナノエスノグラフィの分析手法としてのモデルを用いた分析結果と考察

上述のように、本論文では、研究協力者5名の「敬語使用の必要性を認識し、それを維持する」という径路（図5）を分析し、さらにイメージネーションループが発生した分岐点を中心にどのような過去や未来について想像したり思考したりしていたのか（表3）を分析した。ここでは、5名の研究協力者の「敬語を使う」もしくは「敬語を使わない」という行為がどのような記号（促進的記号／抑制的記号）および価値観・信念と結びつき、個々人のアウトカム（今到達している敬語使用に対する態度）として現れていたのかを分析する。

表3 協力者A～E（5名）のイメージネーションループによる分析結果表

	トリガーとなった経験	イメージネーションに影響を与えたリソース	トリガーとなった経験に伴うイメージネーション	アウトカム（今到達している敬語使用への態度）
協力者A	日本で就職活動をする	就職活動に関する情報	タメ語一つでも使ったら落とされるかもしれない（予期）	敬語を使おうとするかどうか自分の判断で決定できるが実際にその場で使えるかどうかは難しいと思っている
		グループ面接	隣にいる日本人と比較されてダメだと思われたくない（予期）	
	相手によって言葉遣いを選ぶようになる	店長からの仕事に対する高評価	初めは店長に反抗的な態度をとってしまうこともあったのに、朝礼でもとも頑張ったという評価をもらえて嬉しかった（想起）	敬語が自然に使えているという自信が生まれている
		職場にいる同国籍の同僚の存在	周りの人に迷惑をかけないように自分たちが日本語力を磨くべきだ（予期）	
	日本人に対する接客機会の増加	毎日、日本語で接客しているおかげで考えなくても敬語が自由に使えるようになった（想起）		
協力者B	大学院の授業でディスカッションに参加する	同国籍の友人が敬語を使って発言する様子	授業中に周りの院生が敬語で話すのを聞いていて、どのようなどきに敬語を使えばいいか分かるようになってきた（想起）	周りの他者を観察することによって自ら得た敬語の使い方を実践しようとしている
		ゼミの指導教官に対する尊敬の気持ち	「郷に入れば郷に従え」という気持ちもあれば、先生に自分を印象づけることができる（予期）	
		接客中は「お客様は神様」という考え方	敬語を使うことで日本人との信頼関係を築くことができる（予期）	
協力者C	同年代の日本人宿泊客を接客する	職場に日本語能力保持者がいない現状	日本語ができるスタッフは自分しかいない（想起）	「敬語で話さない」ことで親しみやすさを伝えられると思っている
		自分と同年代の日本人客	敬語を使うと相手にプロな印象を与えられるが、海外で新しくできた友達のように思ってもらいたい（予期）	
	フレンドリーな言葉を使う	大学院での研究発表	自分に対してフレンドリーな印象をクラスメートに持ってほしい（予期）	
		指導教官とのやりとり	「です・ます」も使えていない自分に気づく（想起）	
		敬語が使われた手紙文	自分の気持ちと合っていないような気がして、先生に渡したくない（予期）	
	同国籍の友人が仲のいい年上の日本人の先輩に敬語を使っているのを見る	コミュニケーションアプリでのやりとり	仲がいい先輩に対して同国籍の友人が敬語を使っていることが理解できない（想起）	
日本人の日本語教員へ相談できる環境		先輩だと言っても友達なのに、どうして敬語を使うのかという悩みを聞いてほしい（予期）		
日本語教員が日常生活の中で書いたメール文		自分の気持ちばかりを優先して、相手がどう思うのかを考えることが不十分だったと感じる（予期）		

	トリガーとなった経験	イメージーションに影響を与えたりソース	トリガーとなった経験に伴うイメージーション	アウトカム（今到達している敬語使用への態度）
協力者 D	数人の日本人から業務内容だけでなく日本語を指摘される	日本人だらけの日常	わざと失礼な話し方をしているんじゃない？と日本人から言われて落ち込む（想起）	日本人とうまくコミュニケーションをしたいという思いと裏腹に職場生活が苦しくなる
		日本人の態度	日本人の考え方が分からずに中国人として嫌な思いをする（想起）	
		自分が話す日本語に対する反省	言い方が強めで柔らかくできなかったせいで、日本人に嫌な思いをさせたと感じる（想起）	
	中国国内にある日系企業の生客会社で面接者 50 人の中から唯一採用される	日本人の面接官からの高評価	とても話しやすい人だと言ってもらえた（想起）	
		入社後の日本人社員からの高評価	敬語の使い方と日本人の考え方がよく分かっていると褒めてもらった（想起）	
		日本で働いた時の辛い経験	あの時に自分の日本語レベルを反省して努力したから今があると思う（想起）	
協力者 E	外国人の留学生仲間からどうしてタメ語で話さないのかという質問をされる	相手の話し方（敬語かタメ語か）	同じレベルで話ができないと負い目を感じる（想起）	周りの人が敬語を使っているかどうかを見て自分もそれを真似しようとする
		日本人が自分に対して敬語を使わなくなったとき	外国人だというステレオタイプから抜け出したい（予期）	
		その場に溶け込みたい自分の性格	周りの人の話し方に合わせようとして疲れる（想起）	
	日本で就職することをやる	書籍やニュースで話題になる日本の若者の敬語に関する情報	日本社会の枠組みでは敬語使用はとても重要なものだ（想起）	もし自分が将来的に日本社会に溶け込む必要があれば敬語をマスターしなければならない
		日本人の若者も敬語が得意ではないという状況	社会人になってからだんだん日本社会に溶け込むのが日本流だ（想起）	
		日本で就職しないという進路選択	日本で就職するなら社会に溶け込むために敬語は必須だが、そうでなければマスターする必要はない（予期）	

本論文では、記号を促進的記号と抑制的記号の二種類に分類した。促進的記号とは、「新しいことへ導く記号の働き」を重視して作りだした記号概念であり、ヴァルシナーは「記号が働きかけるときは現在であるがその記号を受けて人が何かを行うときには常に未来に向かって」ということを重視すべきだ」として促進的記号の重要性を述べている（サトウ 2019a）。よって、本論文においては、「敬語を使う」という行為へ導いた記号を促進的記号とする。また、促進的記号とは反対に「抑制的記号」と呼ばれる記号が概念化されている。抑制的記号とは、その行為

を妨害する記号（Valsiner 2014/2024）であり、本論文においては「敬語を使わない」という行為へ導いた記号を抑制的記号とする。このような記号は心理的プロセスにおいて過去と現在を橋渡しする役割を持ち、記号の意味が個人的な価値志向として内化されると、記号は何か新しい状態に向かう際のガイドとなる（北出 2025）。なお、促進的記号および抑制的記号はイメージーションループによって分析されたりソースをもとに抽出した。イメージーションは TEA の概念で言えば、分岐点（BFP）で働き、次の時点への移行を導く役割をする。分岐点でイメージー

ションは自己内対話を促進し、ある記号を促進的記号ならしめ、そして発達のダイナミズムを生み出す（木戸 2023）ものである。

1 敬語使用に関わる促進的記号と抑制的記号の分析結果と考察

本論文では、イメージーションループのリソースをもとに記号を検討し、「敬語を使う」方向へと導いた促進的記号を「日本社会に関わる傾向」「個人のおかれた状況」「身近に接する他者」「個人的な思考」の四つに分類した（表4）。

一つ目のカテゴリーである「日本社会に関わる傾向」は、研究協力者らが日本社会全体の規範や慣習、社会的期待に関する情報を通じて、敬語使用の必要性を認識したリソースを含む。具体的にいえば、「“社会人から敬語の必要性が高くなる”という日本社会」[協力者 D、E]、「就活や日本人の若者の敬語などに関する情報」[協力者 A、E]、「グループ面接」[協力者 A]、「“お客様は神様だ”という考え方」[協力者 B] の4つの記号から成る。これらの記号を「日本社会に関わる傾向」としてカテゴリー化した理由は、いずれも協力者個人と特定の他者との直接的な相互作用ではなく、日本社会という大きな枠組みにおける規範、制度、文化的価値観に関わるものであるためである。

二つ目のカテゴリーである「個人のおかれた状況」は、研究協力者らが置かれた具体的な環境条件や過去の経験に関するリソースを含む。具体的にいえば、「周囲に日本語能力保持者がいない現状」[協力者 C] と「日本人とのコミュニケーションで感じた辛い経験」（協力者 D）の2つの記号から成る。これらは協力者の意図や志向とは関係なく起こった出来事から成るものであり、客観的な状況が要因となった記号である。

三つ目のカテゴリーである「身近に接する他者」は、協力者らが日常的に接する具体的な他者

との相互作用に関するリソースを含む。これらは、特定の個人や集団との直接的な関係性の中で生じた経験から導き出されたものである。具体的には、「他者からの高評価」[協力者 A、D、E]、「同国籍の他者の存在」[協力者 A、B]、「相手の態度や話し方」[協力者 A、D、E]、「日本語教員の対応」[協力者 C] の4つの記号から成る。これらはいずれも抽象的な社会規範や環境条件ではなく、具体的で特定可能な他者との直接的な相互作用に関わるものである。

四つ目のカテゴリーである「個人的な志向」は、協力者らの内的な価値観、自己認識に関するリソースを含む。具体的にいえば、「相手に対する尊敬の気持ち」[協力者 B]、「自身の日本語レベルに対する反省」[協力者 C、D]、「その場に溶け込みたい性格」[協力者 E]、「言葉に対する自身の考え方」[協力者 C] の4つの記号から成る。これらは外的な状況や他者の影響というよりは、協力者自身の主体的な態度や志向性を表すものである。

次に、「敬語を使わない」方向へと導いた抑制的記号を「個人のおかれた状況」「身近に接する他者」「個人的な思考」の三つに分類した（表4）。ここで注目したいのは、促進的記号で見られた「日本社会に関わる傾向」というカテゴリーが抑制的記号には見られなかったことである。このことは、「日本社会に関わる傾向」という記号が基本的に敬語使用を支持するものに傾いていることが示唆され、「敬語を使わない」という選択は協力者らにとって社会的な圧力と対峙するものになり得る可能性が考えられる。

一つ目のカテゴリーである「個人のおかれた状況」には、「周囲に日本語能力保持者がいない現状」[協力者 C] が見られた。この記号は抑制的記号だけでなく、「敬語を使う」方向へと導く促進的記号としても抽出されている。ここで、この記号が抑制的記号として機能したのは、協力者 C の周りに日本語能力保持者がいなかったという状況が、敬語の適切性を確認する機会が

表4 協力者A～E（5名）の「敬語使用」に関わる記号とリソースの関係

	敬語使用に関わる記号の カテゴリー	具体的な記号	協力者A, B, C, D, Eのリソース
「敬語を使う」方向へ 導いた促進的記号	日本社会に関わる傾向	“社会人から敬語の必要性が高くなる”という日本社会	日本人だらけの日常 [D] 日本人の若者も敬語が得意ではないという状況 [E]
		日本社会に関する情報	就職活動に関する情報 [A] 書店やニュースで話題になる日本の若者の敬語使用に関する情報 [E] 日本人の若者も敬語が得意ではないという状況 [E]
		グループ面接	グループ面接 [A]
		“お客様は神様”という考え方	接客中は「お客様は神様」という考え方 [B]
	個人のおかれた状況	身近に日本語能力保持者がいない現状	職場に日本語能力保持者がいない現状 [C]
		日本人とのコミュニケーションで感じた辛い経験	日本で働いた時の辛い経験 [D]
	身近に接する他者	他者からの高評価	店長からの仕事に対する高評価 [A] 日本人の面接官からの高評価 [D] 入社後の日本人社員からの高評価 [E]
		同国籍の他者の存在	職場にいる同国籍の同僚の存在 [A] 同国籍の友人が敬語を使って発言する様子 [B]
		相手の態度や話し方	日本人に対する接客機会の増加 [A] 日本人の態度 [D] 相手の話し方（敬語かタメ語か [E]） 日本人が自分に対して敬語を使わなくなったとき [E]
		日本語教員の対応	日本人の日本語教員へ相談できる環境 [C] 日本語教員が日常生活の中で書いたメール文 [C]
	個人的な志向	言葉に対する自身の考え方	メッセージアプリでのやりとり [C]
		自身の日本語レベルに対する反省	指導教官とのやりとり [C] 自分が話す日本語に対する反省 [D]
		その場に溶け込みたい性格	その場に溶け込みたい性格 [E]
相手に対する尊敬の気持ち		ゼミの指導教官に対する尊敬の気持ち [B]	
「敬語を使わない」方向へ 導いた抑制的記号	個人のおかれた状況	身近に日本語能力保持者がいない現状 [C]	
	身近にいる他者	相手の態度や話し方 相手の話し方（敬語かタメ語か） [E]	
	個人的な志向	日本で就職しないという進路選択	日本で就職しないという進路選択 [E]
		近い年齢に対する個人の考え方	自分と同年代の日本人客 [C]
		相手に親しみやすさを伝えることを優先する気持ち	大学院での研究発表 [C] 指導教官とのやりとり [C] 敬語が使われた手紙文 [C]

限られ、自己の言語使用に対する主体的な態度（親しみを表現するために敬語を使わないということ）を優先することにつながっていたからであると考えられる。一方、促進的記号として機能したのは、協力者C自身がその場で唯一の日本語能力を有するという点で高い日本語能力が期待されているという認識を持っていたからである。つまり、同じ記号であっても、文脈によって、記号が促進的記号にも抑制的記号にもなり得るということが協力者Cの分析から理解することができる。

二つ目のカテゴリーである「身近にいる他者」には、「相手の態度や話し方」[協力者E]が見られた。これは協力者Eの「相手の話し方（敬語かタメ語か）」というリソースから抽出したものであり、相手がタメ語を使用している場合はそれに合わせて自分もタメ語を使用したいという自己内での調整が行われたり、反対に相手が敬語を使用していれば自身もそのように振舞いたいという気持ちで敬語使用を試みるといった態度に繋がっていたりしたことがわかった。この協力者Eの事例は、相手の具体的な敬語使用が、協力者の言葉選びに直接的な影響を与えていたことを示している。

三つ目のカテゴリーである「個人的な志向」には、協力者Cの「近い年齢に対する考え方」、「相手に親しみやすさを伝えることを優先する気持ち」、協力者Eの「日本で就職しないという進路選択」が見られた。まず、「近い年齢に対する考え方」という抑制的記号は、年齢が近い相手に対しては敬語を使う必要性が低いという協力者Cの価値観を示している。また、「相手に親しみやすさを伝えることを優先する気持ち」という抑制的記号は、協力者Cの「大学院での研究発表」「指導教官とのやりとり」「敬語が使われた手紙文」といった複数のリソースから抽出された。ここで共通するのは協力者Cが敬語使用と親しみやすさの表現の狭間で葛藤を経験し、最終的に敬語を使用しないことで親しみやすさを優先

するという価値判断を行ったことである。また、協力者Eの「日本で就職しないという進路選択」という抑制的記号は協力者Eの進路設計という主体的な決定が、現時点での敬語使用の必要性への認識に影響を与えたことを示している。このことから、日本社会に長期的に関わらないのであれば敬語をマスターする必要はないだろうという主観的な考えが敬語の完全な習得の優先度を低下させたことが理解できる。このように、個人的な志向で分類された三つの抑制的記号は、いずれも主体的な価値判断、進路設計、相手との関係性の構築に関わる志向性といった内的要素を中心としたものである。

本論文で抽出された三つのカテゴリーの抑制的記号は、いずれも個人レベルまたは対人レベルでの要因であり、マクロレベルの社会規範に対して、ミクロレベルの要因が優位に立った結果として「敬語を使わない」選択が生じていたと考えられる。総じていえば、「敬語を使う」か「使わない」かといった協力者らの敬語使用が、マクロな社会的な要因からミクロな個人的な要因まで、複数のレベルの促進的記号および抑制的記号によって調整されていることが理解できる。

2 「ナノエスノグラフィの分析手法としてのモデル」を用いた分析結果と考察

上記では、協力者5名の敬語使用に関わる促進的記号と抑制的記号について説明した。以下では、TLMGとイメージーション理論を援用した「ナノエスノグラフィの分析手法としてのモデル」（図1）を用いてそれぞれのアウトカム（「敬語を使う」または「敬語を使わない」）に伴う記号（表4）、価値観・信念とイメージーションについて分析した結果と考察を述べる。なお、イメージーションループによる分析については、上述した表3を用いる。

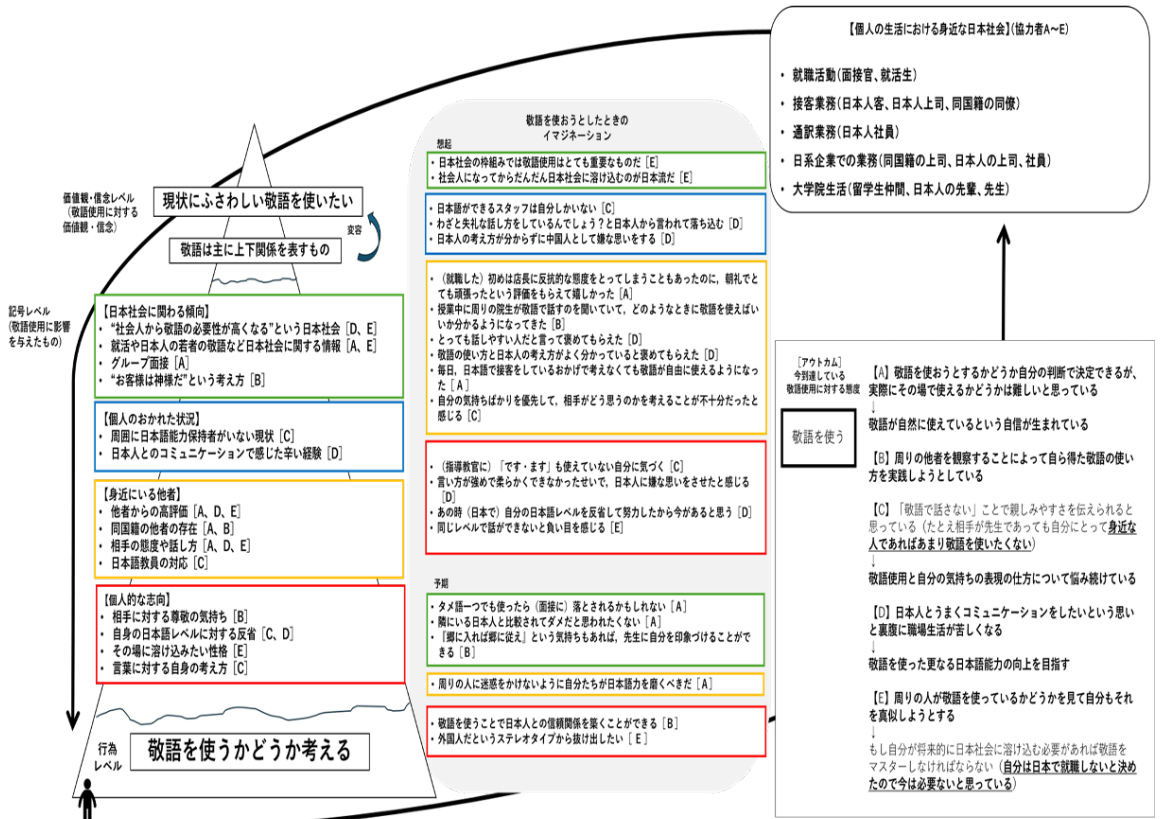
(1) 「敬語を使う」アウトカムに伴う記号、
価値観・信念とイメージネーション

「敬語を使う」アウトカムに伴う記号、価値観・信念とイメージネーションについての分析結果を図6に示す。図6は、協力者らが「敬語を使うかどうか考える」時点において、どのような価値観・信念レベルと記号レベルの調整を行い、「敬語を使う」アウトカムへと至るのかを示したものである。つまり、個人の心理内プロセス（価値観・信念と記号）が、具体的な「個人の生活における身近な日本社会」との相互作用を通じて、どのように外化された行為（敬語使用）として現れるかを示している。なお、図6でも示すとおり、協力者らは、就職活動（面接官、就活生）、

接客業務（日本人客、日本人上司、同国籍の同僚）、通訳業務（日本人社員）、日系企業での業務（同国籍の上司、日本人の上司、社員）、大学院生活（留学生仲間、日本人の先輩、先生）という「個人の生活における身近な日本社会」との関わりを持っていた。協力者らは、「敬語を使う」というアウトカムに対して、それぞれの立場から「今到達している敬語使用に対する態度」を確立していた。各協力者の「今到達している敬語使用に対する態度」の詳細は以下のとおりである。

・協力者A：「敬語を使おうとするかどうか自分の判断で決定できるが、実際にその場で使えるかどうかは難しいと思っている」という態度から「敬語が自然に使えているという自信が生まれている」という態度に変容した。

図6 「敬語を使う」アウトカムに伴う記号、価値観・信念とイメージネーション



- ・協力者 B：「周りの他者を観察することによって自ら得た敬語の使い方を実践しようとしている」という態度を維持した。
- ・協力者 C：「“敬語で話さない”ことで親しみやすさを伝えられると思っている（たとえ相手が先生であっても自分にとって身近な人であればあまり敬語を使いたくない）」という態度から「敬語使用と自分の気持ちの表現の仕方について悩み続けている」という態度に変容した。
- ・協力者 D：「日本人と上手くコミュニケーションをしたいという思いとは裏腹に職場生活が苦しくなる」という態度から「敬語を使った更なる日本語能力の向上を目指す」という態度に変容した。
- ・協力者 E：「周りの人が敬語を使っているかどうかを見て自分もそれを真似しようとする」という態度から「もし自分が将来的に日本社会に溶け込む必要があれば敬語をマスターしなければならない（自分は日本で就職しないと決めたので今は必要ないと思っている）」という態度に変容した。

まず、協力者 5 名の敬語使用に対する価値観・信念についての分析結果と考察を述べる。協力者らは日本語を学習するという学習者の立場から、価値観・信念レベルにおいて「敬語は主に上下関係を表すもの」として敬語を捉えていたことは共通しており、この認識が敬語使用の基本的な判断基準となっていた。王 (1989) によれば世代・身分などの人間関係に応じて厳しい使い分けが要求される。このような文化的背景が、協力者らの「敬語は主に上下関係を表すもの」という基本的認識を形成する基盤となっていると考えられる。

しかし、日本語の「敬語を使う」選択においては、この基本認識に加えて「現状にふさわしい敬語を使いたい」という、より状況に適した表現を求める価値観も見られた。日本語の敬語は、固定

的な身分を背景に話題として登場する人物への敬意を示すばかりではなく、目の前の話し相手への配慮を優先し、その意味は「心理的距離」を表す (井上・鎌水 2017) とされており、協力者らも各々の経験を通じて敬語使用は主に上下関係を示すものではないということを理解し、「現状にふさわしい敬語を使いたい」という価値観へと変容したと考えられる。この二重の価値観—「敬語は主に上下関係を表すもの」という基本認識と「現状にふさわしい敬語を使いたい」という状況への認識の強化—は、具体的な経験や状況との相互作用を通じて維持され、変容していた。

次に、表 4 で示した促進的記号と表 3 で示したイマジネーション (想起と予期) を図 6 に図示した結果について考察する。図 6 で示した促進的記号は、協力者らが日本社会における具体的な場面 (setting) で経験した出来事 (トリガーとなった経験) を経て発生しており、個人の心理内で調整される記号として機能していた。そして、促進的記号に成らしめたさまざまな想起と予期 (イマジネーション) が行われ、「敬語を使う」というアウトカムへと導いていたことが分かった。以下では四つのカテゴリーごとに、促進的記号とイマジネーション (想起と予期) の関係を論じる。

「日本社会に関わる傾向」としてカテゴライズされた促進的記号は、日本社会全体の規範や慣習、社会的期待に関する情報であり、協力者らのマクロレベルでの敬語使用の必要性認識と関連していた。

想起段階では、協力者 E の「日本社会の枠組みでは敬語使用はとても重要なものだ」「社会人になってからだんだん日本社会に溶け込むのが日本流だ」という過去の認識や経験が活性化されていた。これらの想起は、日本社会における敬語の重要性を再確認し、敬語使用の動機づけを高める機能を果たしていた。

予期段階では、協力者 A の「タメ語一つでも使ったら (面接に) 落とされるかもしれない」

「隣にいる日本人と比較されてダメだと思われたくない」という未来への予測、協力者Bの「『郷に入れば郷に従え』という気持ちもあれば、先生に自分を印象づけることができる」という期待が形成されていた。これらの予期は、敬語を使うことで日本社会において受け入れられ、評価されるという未来像を描くものであり、現在の敬語使用の選択を促進していた。特に注目すべきは、協力者Aの「タメ語一つでも使ったら（面接に）落とされるかもしれない」という予期が、就職活動という日本社会の制度的場面における敬語使用の重要性を示していることである。また、協力者Bの「『郷に入れば郷に従え』という気持ち」は、日本社会の規範に適応しようとする積極的な姿勢を示していると考えられる。

「個人のおかれた状況」としてカテゴライズされた促進的記号は、協力者が置かれた具体的な環境条件や過去の出来事であり、主に想起段階で機能していた。

想起段階では、協力者Cの「日本語ができるスタッフは自分しかない」という現状認識、協力者Dの「『わざと失礼な話し方をしているんでしょう？』と日本人から言われて落ち込む」「日本人の考え方が分からずに中国人として嫌な思いをする」という過去の辛い経験が想起されていた。協力者Dの想起は、過去の否定的な経験が、敬語を含む日本語能力の向上への動機づけとして機能していることを示している。また、協力者Cの想起は、唯一の日本語話者としての責任感と、より高い日本語能力を求められているという認識を強化するものであった。これらの想起は、個人が置かれた状況の制約や困難が、敬語使用への動機づけを高める契機となることを示している。

「身近にいる他者」としてカテゴライズされた促進的記号は、具体的な他者との相互作用に関するものであり、想起と予期の両段階で重要な役割を果たしていた。

想起段階では、以下のような他者との具体的

な相互作用の経験が想起されていた。

協力者Aは、「(就職した)初めは店長に反抗的な態度をとってしまうこともあったのに、朝礼でとても頑張ったという評価をもらえて嬉しかった」「毎日、日本語で接客をしているおかげで考えなくても敬語が自由に使えるようになった」という、他者からの評価と実践を通じた習得の経験を想起していた。協力者Bは、「授業中に周りの院生が敬語で話すのを聞いていて、どのようなときに敬語を使えばいいか分かるようになってきた」という、観察を通じた学習の経験を想起していた。協力者Cは、「自分の気持ちばかりを優先して、相手がどう思うのかを考えることが不十分だったと感じる」という、自己省察を伴う想起をしていた。協力者Dは、「とっても話しやすい人だと言って褒めてもらった」「敬語の使い方と日本人の考え方がよく分かっていると褒めてもらった」という、肯定的な評価の経験を想起していた。これらの想起は、「他者からの高評価」という促進的記号が、敬語使用に対する自信や動機づけを高める重要な機能を持つことを示している。また、同国籍の他者や日本人の言語使用を観察することが、敬語使用の学習において重要な役割を果たしていることも明らかとなった。

予期段階では、協力者Aの「周りの人に迷惑をかけないように自分たちが日本語力を磨くべきだ」という未来への決意が形成されていた。この予期は敬語を含む日本語能力の向上を目指す動機づけを示している。

「個人的な志向」としてカテゴライズされた促進的記号は、協力者の内的な価値観、自己認識、感情に関するものであり、想起と予期の両段階で機能していた。

想起段階では、以下のような自己省察や自己評価の経験が想起されていた。協力者Cは、「(指導教官に)『です・ます』も使えていない自分に気づく」という、自己の日本語能力に対する気づきを想起していた。協力者Dは、「言い方が強め

で柔らかくできなかつたせいで、日本人に嫌な思いをさせたと感じる」「あの時（日本で）自分の日本語レベルを反省して努力したから今があると思う」という、自己反省と成長の実感を想起していた。協力者 E は、「同じレベルで話ができないと負い目を感じる」という、他者との比較における劣等感を想起していた。これらの想起は、自己の日本語能力に対する批判的認識が、敬語学習への動機づけとして機能していることを示している。特に、協力者 D の「あの時（日本で）自分の日本語レベルを反省して努力したから今があると思う」という想起は、過去の否定的な経験が、現在の肯定的な自己評価につながっていることを示しており、想起と予期の循環のプロセスの重要性を示唆している。

予期段階では、協力者 B の「敬語を使うことで日本人との信頼関係を築くことができる」「外国人だというステレオタイプから抜け出したい」という未来への期待が形成されていた。これらの予期は、敬語使用が単なる規範への適応ではなく、信頼関係の構築やアイデンティティの表現という、より積極的な自己実現の手段として位置づけられていることを示している。

以上のことから TLMG による行為-記号-価値観・信念の分析にイマジネーションループによる分析（表 3）を加えることにより、想起と予期が循環的なプロセスを通じて個人の敬語使用に関する意味システムが形成されていくことを示した。

本論文において想起段階では、過去の具体的な経験が現在において再解釈され、その解釈が単なる記憶の再生ではなく、現在の状況や目的に応じた能動的なプロセスになる。例えば、協力者 D の「日本人から指摘された」という過去の経験は、当初は否定的な経験として記憶されていたが、その後の学習や就職成功を経て、「自己成長のきっかけとなった重要な経験」として再解釈されたことが分かる。また、予期段階では、未来の結果を予測し、それに基づいて現在の

行為を調整することが示された。例えば、協力者 A の「タメ語一つでも使ったら（面接に）落とされるかもしれない」という予期は、就職活動という具体的な場面における敬語使用の重要性を認識させた。そして、予期に基づいて選択された行為の結果が新たな経験となり、次の想起の対象となる。このループを通じて、協力者らは敬語使用に関する意味システムを徐々に構築していったと考えられる。

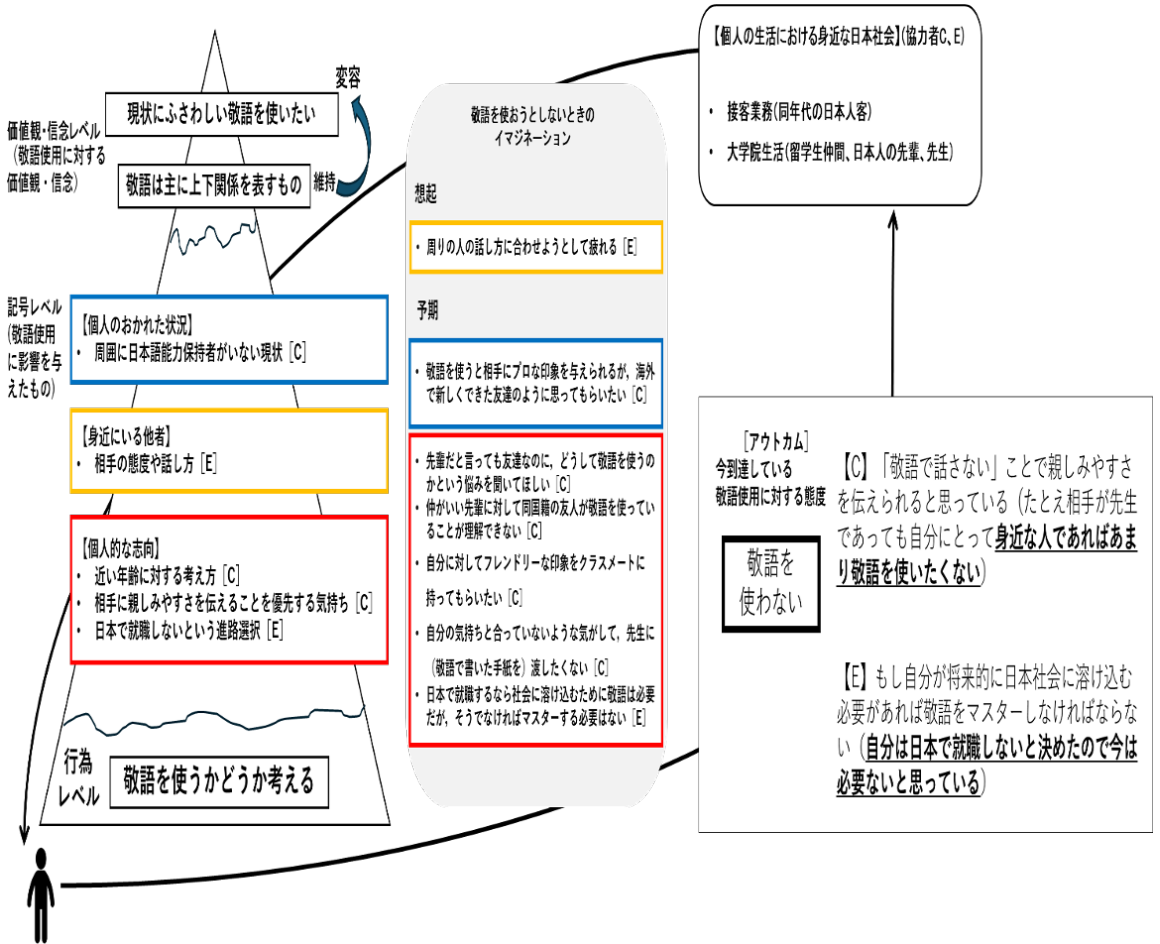
(2) 「敬語を使わない」アウトカムに伴う 価値観・信念とイマジネーション

図 7 は、協力者 C と E が「敬語を使うかどうか考える」時点において、どのような価値観・信念レベルと記号レベルの調整を行い、「敬語を使わない」アウトカムへと至るのかを示したものである。なお、図 7 でも示すとおり、協力者らは、接客業務（同年代の日本人客）、大学院生活（留学生仲間、日本人の先輩、先生）という「個人の生活における身近な日本社会」との関わりを持っていた。

本論文で「敬語を使わない」というアウトカムに至った経験をしていた協力者は C と E のみであった。また、特筆すべきこととして、協力者 C は価値観・信念の変容前、協力者 E は変容後に「敬語を使わない」というアウトカム「今到達している敬語使用に対する態度」を確立していたことが挙げられる。

- ・協力者 C：「“敬語で話さない”ことで親しみやすさを伝えられると思っている（たとえ相手が先生であっても自分にとって身近な人であればあまり敬語を使いたくない）」という態度【変容前の態度】
- ・協力者 E：「もし自分が将来的に日本社会に溶け込む必要があれば敬語をマスターしなければならない（自分は日本で就職しないと決めたので今は必要ないと思っている）」

図7 「敬語を使わない」アウトカムに伴う記号、価値観・信念とイメージネーション



という態度【変容後の態度】

協力者Cの場合、大学卒業後のマカオでのホテル勤務時から既に“敬語で話さない”ことで親しみやすさを伝えられるという態度を持っており、その後の日本の大学院進学でも基本的にこの態度を維持していた。そのため、敬語使用に対する価値観・信念についても基本的には「敬語は主に上下関係を表すもの」という価値観を維持していたことが分かる。しかし、協力者Eの場合は、日本語学習中の頃から「敬語は複雑だが重要だ」という認識を持ち敬語使用の必要性を認識していたが、大学院生として日本に留学中の進路選択で「日本で就職しない」ということを

決めた後、敬語使用の必要性は認識しつつも、必ずしも敬語をマスターして使う必要はないという考え方に变容していたことが明らかとなった。つまり、協力者Cのように、元々持っていた個人的志向が持続する場合と、協力者Eのように、新たな経験や決定によって敬語の必要性に伴う行為が变容する場合がある。

次に、表4で示した抑制的記号と表3で示したイメージネーション(想起と予期)を図7に図示した結果について考察する。以下では、図7で示した三つのカテゴリーごとに、抑制的記号とイメージネーション(想起と予期)の関係を論じる。

「個人のおかれた状況」としてカテゴリー化さ

れた抑制的記号は、周囲に日本語能力保持者がいない現状〔協力者C〕というものであり、そこでは「敬語を使うと相手にプロな印象を与えられるが、海外で新しくできた友達のように思ってもらいたい」という予期が影響を与えていた。この予期は、協力者Cがマカオのホテルで同年代の日本人宿泊客を接客した際の経験に基づくものであり、敬語を使うことは「プロフェッショナルな距離」を作ることの意味し、それは「友達のような親しさ」を伝えたいという自己の志向と矛盾していた。滝浦(2017)が蘆(2001)の調査を引用しながら論じているように、中国語では「相手への敬意が喪失した場合または相手との距離が近づいたと感じた場合には“您”から“你”へシフトされる」。協力者Cは、相手に親しみを感じた場合や親近感を表すために、敬語を使用することにためらいの気持ちを持っていたのではないかと考えられる。

「身近にいる他者」としてカテゴライズされた抑制的記号は、相手の態度や話し方〔協力者E〕というものであり、そこでは「周りの人の話し方に合わせようとして疲れる」という経験が想起されていた。この想起は、敬語使用に伴う心理的負担を示すものであると考えられ、個人が社会的な期待に応えようとする過程で生じるストレスを表していると考えられる。井上・鏝水(2017)が指摘するように、現代日本語の敬語は「依頼や負い目、負担の度合いによる流動的な使い分けが発達して、心理が前面に出るようになった」という特徴を持つ。協力者Eの「疲れる」という感覚は、状況依存的な判断を常に求められる敬語ないし日本語使用の心理的負担を示している。また、蒲谷(2006)が指摘するように、その場での状況を適切に判断し、どう自己表現を実現するのかということについて、人は瞬時に考え実践する必要がある。このような瞬時に判断し実践することが求められる敬語使用は、協力者Eにとって抵抗感を生み出す要因にもなっていたのではないだろうか。

最後に、「個人的な志向」としてカテゴライズされた抑制的記号には、協力者Cの「近い年齢に対する考え方」「相手に親しみやすさを伝えることを優先する気持ち」が見られた。協力者Cは「先輩だと言っても友達なのに、どうして敬語を使うのかという悩みを聞いてほしい」「仲がいい先輩に対して同国籍の友人が敬語を使っていることが理解できない」「自分に対してフレンドリーな印象をクラスメートに持ってもらいたい」「自分の気持ちと合っていないような気がして、先生に(敬語で書いた手紙を)渡したくない」という予期が影響を与えており、これらの予期は協力者Cが「親しさ」と「敬意」の狭間で葛藤していたことが窺える。そして、協力者Cにとって敬語を使うことは「距離を作る」ことと直結し、親しい関係において敬語を使わないことが相手への配慮であると考えていたと思われる。蘆(2009)が指摘するように、日本語の呼称には社会的通念に従って行われる客観的で定型的な特徴が見られるのに対して、中国語の呼称は、相手との関係や相手の身分などに基づいて、個人的な判断で決定する主観的で多様な特徴が見られる。協力者Cの予期は、中国語の主観的・多様な敬語使用の特徴を反映しており、日本語の客観的・定型的な敬語使用の特徴との間に緊張関係を生み出していたのではないかと。特に「自分の気持ちと合っていないような気がして、先生に(敬語で書いた手紙を)渡したくない」という予期は、上田(2014)が指摘する敬語の「自己表現」機能に関わる重要な問題を提起している。協力者Cにとって、「敬語は上下関係を表すものである」という価値観が維持されており、形式的に正しくても「自分らしくない」言語使用は受け入れがたいものとなっていたと考えられる。

また、協力者Eの「日本で就職しないという進路選択」は「日本で就職するなら社会に溶け込むために敬語は必要だが、そうでなければマスターする必要はない」という予期が影響を与えていた。この予期は、敬語学習の必要性を将来

の役割（日本社会の一員として働くか否か）との関連で位置づけたものである。協力者 E にとっては、敬語は単なる言語スキルではなく、特定の社会的役割（日本で働く社会人）と結びついたものであり、その役割を選択しないということは、敬語をマスターする必要性を感じさせないものとなった。

総じていえば、協力者 C と E の「敬語を使わない」というアウトカムは、単なる能力不足や規範への無理解ではなく、個人の経験から得た自身なりの考えに基づいた主体的な選択であったことが明らかとなった。特に、協力者 C にとっては、敬語を使わないことは相手との心理的な距離を縮め、親密な関係性を表現する手段であった。井出（1982）が指摘するように、「敬語使用を決定する要因には話し手のさまざまな形の自己表出的な欲求」があり、協力者 C の選択は「親しみやすい自分」を表現したいという自己表現的な欲求に基づくものであった。また、協力者 E にとって、敬語は日本社会に溶け込むための手段の一つであり、その社会に長期的に関わらないという選択をした場合の優先度が低くなるということが明らかとなった。このように、敬語使用における「敬語を使わない」選択が、社会規範との主体的な交渉のプロセスの中にあり、個人の自己表出的欲求や実存的な問題と深く関連していることが考察できた。

V おわりに—今後の課題

本論文では、中国語を母語とする日本語学習者 5 名を対象に、TLMG とイメージーション理論を援用した「ナノエスノグラフィの分析手法としてのモデル」を用いて、敬語使用に対する意識の変容を示し、その結果を分析し考察した。

まず一つ目に協力者らの「敬語を使う」または「敬語を使わない」という選択に影響を与えた促進的記号および抑制的記号が明らかとなった。

これらは「日本社会に関わる傾向」「個人のおかれた状況」「身近に接する他者」「個人的な志向」という四つのカテゴリーに分類され、想起と予期という時間的プロセスを通じて、協力者らの敬語使用を調整していたことがわかった。木戸（2023）が、イメージーションは「いま、ここ」の具体的な経験から距離をとるために、より抽象化された経験となり、そのときにイメージーションは記号として作用すると指摘しているように、協力者らのイメージーションは、過去の具体的な経験が抽象化されて記号的に作用し、現在の敬語使用に対する態度に影響を与えていた。

二つ目に、協力者らは、「敬語は主に上下関係を表すもの」という基本的認識を維持しながらも、日本社会での具体的な経験を通じて「現状にふさわしい敬語を使いたい」という状況を判断しながら敬語を使用するという価値観を形成していた。また、敬語を「日本社会で生活するためのツールの一つ」として使用していく中で、その時々に応じた個々人の判断や感情に基づいた想像のプロセスが「敬語を使うか使わないか」という行為に大きな影響を与えていた。蒲谷（2013）が指摘するように、待遇意識は主体自身とその関係性をどのように捉えているかによって変わるものであり、どのようにコミュニケーションを行おうとするのかということは個々の主体によって変わる。このような主体の認識がコミュニケーションに大きく関わる敬語使用は、まさに過去の経験の想起と未来への予期が循環的に作用する複雑な意味構築の文化的実践であると言えるだろう。

最後に、本論文で用いたナノエスノグラフィの分析手法は、TEA の「実存性」を基盤としながら、エスノメソロジーの「理念性」という視点を相補的に取り入れることを試みた。協力者 5 名それぞれの具体的で固有の経験を詳細に記述することで「実際に存在する」敬語使用の多様性と個別性を明らかにするとともに、敬語使用の判断の基準、敬語使用がされる社会的背景と

いった「敬語使用という現象の背後にある本質的なこと」(日本社会に関わる傾向、個人のおかれた状況、身近にいる他者、個人的な志向)を記号レベルで抽出した。ただし、本論文は協力者の語りに基づく心理内的プロセスの分析が主であり、実際の会話場面における相互行為の観察などは行っていない。今後の課題としては、敬語使用の実践的な会話場面の分析を加えるなど、現場における敬語使用の様相を統合的に理解できるようにすることが課題である。

VI 引用文献

- 崔亜蕾 (2012) 中国人留学生の敬語意識についての一考察—中国人留学生へのアンケートを中心に。言語と交流, (15), 97-109.
- 遠藤織枝 (1990) 日本語学習者の望む敬語教育—アンケート調査から。言語と文化, (3), 1-16.
- 魏春娥 (2013) 日本人と外国人日本語学習者の敬語使用に関する考察—アンケート調査結果の分析を中心に。山口大学文学會志, 63, 125-150.
- Francis, D. & Hester, S. (2004) *Invitation to Ethnomethodology: Language, Society and Interaction*. Sage Publications. 中河伸俊・岡田光弘・是永論・小宮友根 (共訳) (2014) エスノメソドロジーへの招待—言語・社会・相互行為。ナカニシヤ出版。
- 井出祥子 (1982) 言語と性差。言語, 11 (10), 40-48.
- 井上史雄 (2017) 第1章 現代敬語の位置—乱れではなく変化 1-1 敬語は発展途上—この本のあらまし。井上史雄 (編) 敬語は変わる—大規模調査からわかる百年の動き。大修館書店, 5-17.
- 井上史雄・鏑水兼貴 (2017) 第1章 現代敬語の位置—乱れではなく変化 1-3 『敬語の指針』
- に見る現代敬語の性格変化。井上史雄 (編) 敬語は変わる—大規模調査からわかる百年の動き。大修館書店, 35-55.
- Jensen, M. (2020) *Developing Psychology from the Diversity of Living Conditions: Comment in Dialogical Multiplication by Guimarães*. D. Springer.
- 香川秀太 (2009) 第5章 方法論に関する問いかけ 第6節 異種の時間が交差する発達—発達時間論の新展開へ向けて。サトウタツヤ (編) TEMではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして。誠信書房, 157-175.
- 樫田美雄・岡田光弘 (2019) 4-3 エスノメソドロジー (ethnomethodology)。サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実 (編) ワードマップ 質的研究法マッピング—特徴をつかみ、活用するために。新曜社, 174-182.
- 蒲谷宏 (2006) 第I章 「敬語表現」と「敬語表現教育」。蒲谷宏・川口義一・坂本恵・清ルミ・内海美也子 (著) 敬語表現教育の方法。大修館書店, 3-46.
- 蒲谷宏 (2013) 待遇コミュニケーション論。大修館書店。
- 上川多恵子 (2015) 中国人日本語学習者の敬語コミュニケーションに対する意識の変容—TEAを用いた一考察。立命館大学大学院言語教育情報研究科日本語教育学プログラム (修士課程リサーチペーパー)。
- 上川多恵子 (2017) 第1章 第1節 中国人日本語学習者の敬語使用。安田裕子・サトウタツヤ (編) TEMでひろがる社会実装—ライフの充実を支援する。誠信書房, 26-48.
- 上川多恵子 (2019) 中国語母語話者の敬語使用に対する葛藤過程—自分らしさと気持ちをうまく伝えるには?。 *Studies in Language Science Working Papers*, (9), 45-60.
- 上川多恵子・宮下太陽・安田裕子・サトウタツヤ (2024) 共食を通じた結婚初期夫婦の関係構築過程—TEMのイメージネーショ

- ンモデルを用いた一考察. TEA と質的探究, 2 (2), 156-177. https://doi.org/10.60421/jatqi.2.2_156
- 上川多恵子 (2023) 第2章 TEA の基本概念一覽. 上川多恵子・宮下太陽・伊東美智子・小澤伊久美 (編) カタログ TEA—図で響きあう. 新曜社, 5-10.
- 上川多恵子・サトウタツヤ (2025) 複線径路等至性アプローチを用いた「ナノエスノグラフィ」の提案: 異なる文化を理解するための理論的基盤とモデル構築. 質的研究と社会実装, (2), 49-71.
- 北出慶子 (2025) 促進的記号/抑制的記号. サトウタツヤ・安田裕子 (監修)・中坪史典・土元哲平・上川多恵子・中本明世・加藤望 (編) TEA と質的探究用語集. 誠信書房, 90.
- 木戸彩恵 (2023) 第1部 理論 第6章 イマジネーション. 木戸彩恵・サトウタツヤ (編) [改訂版] 文化心理学—理論・各論・方法論. ちとせプレス, 63-75.
- 蘆万才 (2001) 中国語の聞き手に対する敬語使用意識の一考察—二人称代名詞「你」と「您」の使用について. 麗澤大学大学院言語教育研究科年報, 3, 71-82.
- 蘆万才 (2009) 日本語と中国語の呼称の待遇的機能. *Polyglossia: 言語と言語教育—アジア太平洋の声*, 17, 85-94.
- 南博文 (1996) 自明的な世界の解剖—エスノメソドロジー. 浜田寿美男 (編) 《別冊発達 20》発達の理論—明日への系譜. ミネルヴァ書房, 135-154.
- 宮下太陽・上川多恵子・サトウタツヤ (2022a) TEA (複線径路等至性アプローチ) における記号概念の考察—パース, ヴィゴツキー, ヴァルシナーを手がかりに. 立命館人間科学研究, (44), 15-31. <https://doi.org/10.34382/00016827>
- 宮下太陽・上川多恵子・サトウタツヤ (2022b) TEM (複線径路等至性モデリング) のイマジネーションモデルに関する考察—記号圏とイマジネーション理論を踏まえて. 立命館人間科学研究, (44), 49-63. <https://doi.org/10.34382/00016829>
- 森直久 (2009) 第3章 TEM 動乱期 (2006-2007) 第3節 第一期 TEM 完成, その後. サトウタツヤ (編) TEM ではじめる質的研究—時間とプロセスを扱う研究をめざして. 誠信書房, 75-91.
- 中村桃子 (2021) 「自分らしさ」と日本語. 筑摩書房.
- 任麗潔 (2012) 中国高等教育の専攻日本語教育における「敬語教育」に関する調査報告—学習者・教科書・教師という三つの視点から. 待遇コミュニケーション研究, (9), 113-128.
- 任麗潔 (2013) 中国の大学専攻日本語教育における「敬語の仕組み」—『教育要綱』と教科書の分析を通して. 日本語学研究と資料, (36), 24-36.
- 小澤伊久美 (2025) ナノ心理学. サトウタツヤ・安田裕子 (監修) 中坪史典・土元哲平・上川多恵子・中本明世・加藤望 (編) TEA と質的探究用語集. 誠信書房, 99.
- サトウタツヤ (2017) 序章 TEA (複線径路等至性アプローチ) とは何か 第1節 等至性とは何か—その理念的意義と方法論的意義. 安田裕子・サトウタツヤ (編) TEM でひろがる社会実装—ライフの充実を支援する. 誠信書房, 1-11.
- サトウタツヤ (2019a) 第3章 記号という考え方 記号と文化心理学 その1. 木戸彩恵・サトウタツヤ (編) 文化心理学—理論・各論・方法論. ちとせプレス, 27-39.
- サトウタツヤ (2019b) 本書の構想. サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実 (編) ワードマップ 質的研究法マッピング—特徴をつかみ, 活用するために. 新曜社, 2-8.
- 清ルミ (2006) 第II章 「気づき誘導」を求めて—社会人・大学生に必要な待遇表現教育を模索

- する. 蒲谷宏・川口義一・坂本恵・清ルミ・内海美也子(編) 敬語表現教育の方法. 大修館書店, 47-77.
- 滝浦真人 (2005) 日本の敬語論—ポライトネス理論からの再検討. 大修館書店.
- 滝浦真人 (2017) 敬語の対照研究への新視点—二つのアプローチと二つの敬語. 日本語学, 36 (6), 52-62.
- 徳間晴美 (2010) 中上級日本語学習者が抱く敬語使用不安の様相—学習者のことばに基づく質的分析による事例. 言語文化と日本語教育, 40, 41-50.
- 上田あき帆 (2014) 社会人にとって敬語とは何か—マナーブックと学校教育の比較から. 信大言語教育, (23), 1-12.
- Valsiner, J. (2007) *Culture in minds and societies: Foundations of cultural psychology*. Sage Publications. サトウタツヤ (監訳) (2013) 新しい文化心理学の構築—〈心と社会〉の中の文化. 新曜社.
- Valsiner, J. (2014) *An Invitation to Cultural Psychology*. Sage Publications. サトウタツヤ・滑田明暢・土元哲平・宮下太陽 (監訳) (2024) 文化心理学への招待—記号論的アプローチ. 誠信書房.
- Valsiner, J. (2015) The place for synthesis: Vygotsky's analysis of affective generalization. *History of the Human Sciences*, 28 (2), 93-102.
- Valsiner, J. (2018) Towards Nanopsychology: Why Small Data Are Better than Big Data?. 立命館大学大学院人間科学研究科開設記念イベント その1 第8回総合心理学セミナー Valsiner 先生立命館大学客員教授就任記念 公開シンポジウム.
- 王鉄橋 (1989) 現代中国語の敬語表現—日本語との比較. 言語と文化, 2, 25-48.
- 安田裕子 (2015) 径路の可視化 TEA による分析の流れ (その2). 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編) TEA 実践編—複線径路等至性アプローチを活用する. 新曜社, 47-51.
- 安田裕子 (2017) 序章 TEA (複線径路等至性アプローチ) とは何か 第2節 生みだされる分岐点—変容と維持をとらえる道具立て. 安田裕子・サトウタツヤ (編) TEM でひろがる社会実装—ライフの充実を支援する. 誠信書房, 11-25.
- 安田裕子 (2019) 1-2 TEA (複線径路等至性アプローチ). サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実 (編) ワードマップ 質的研究法マッピング—特徴をつかみ, 活用するために. 新曜社, 16-22.
- 安田裕子 (2023) 第10章 採録オンライン講習会 TEA 基礎編—TEMを理解する. 上川多恵子・宮下太陽・伊東美智子・小澤伊久美 (編) カタログTEA—図で響きあう. 新曜社, 91-99.
- 吉岡泰夫 (2008) 第2章 敬語行動と規範意識に関する言語問題の研究. 対人コミュニケーションの社会言語学的研究. Osaka University Knowledge Archive: OUKA, 7-18.
- Zittoun, T. & Gillespie, A. (2015) The loop of imagination. *Imagination in Human and Cultural Development*. London: Routledge, 38-55.
- Zittoun, T. & Gillespie, A. (2016) Imagination: Creating alternatives in everyday life. Glăveanu, V. P. (ed.) *The Palgrave Handbook of Creativity and Culture Research*. Palgrave Macmillan UK, 225-242.
- Zittoun, T. (2020) 2019年度日本発達心理学会国際研究交流委員会公開講演会 講演記録 ライフコースにおけるイマジネーション—社会文化的心理学の視点から (Imagination in the lifecourse: A sociocultural psychology perspective). 発達研究, 34, 204-228.

謝 辞

ご協力いただいた5名の研究協力者の皆様の貴重な経験と率直な語りが本研究の礎となりました。本研究への温かいご支援とご協力に心より感謝申し上げます。

付 記

本論文は第一著者が2023年に提出した博士論文の一部を修正加筆し、再構成したものである。

編集・制作協力：特定非営利活動法人 ratic

<https://ratic.org>

